

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



祭りばやしや盆踊り唄の継承をととして、住民同士のつながりや支え合いを生み出す（安積甚句愛好会）

## 特集 畑の恵み

- 作物の成長を見守り  
収穫をよろこぶことで深まる絆 ③  
さんさんファーム（宮城県亘理町）
- 浪江町に、花開く明日を ⑤  
特定非営利活動法人 Jin（福島県浪江町）
- 出会いが芽吹きつながりを育む ⑦  
市営新立野第二復興公営住宅「菜園会」（宮城県石巻市）

住民が支え合う生活支援② ⑨  
市民有償ボランティア「ささえ愛ネットワーク」（宮城県白石市）

東北の元気⑬ ⑩  
びば！！南三陸（宮城県南三陸町）

東北の元気⑭ ⑪  
安積甚句愛好会（福島県郡山市）

まちのしくみ⑫ ⑫  
住民が見守り合える地域づくりを（宮城県七ヶ浜町）

平成・向こう三軒両隣事情⑬【最終回】⑭  
ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん


宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

いがす特別賞受賞 ⑯  
益城だいすきプロジェクト・きままに（熊本県益城町）



☆専門家に聞く地域づくりのヒント  
（島根大学 教育学部 教授 作野広和さん）



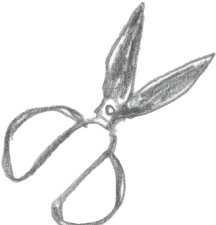
畑の 特集 恵み





土を耕し、種を蒔き、水をやり、  
手塩にかけた畑がもたらしてくれるのは  
作物だけではありません



新しく移り住んだ土地での出会い  
仲間と一緒に作業をするよろこび  
収穫した作物を味わう楽しいひととき  
おすそ分けが結ぶ、ご近所とのつながり  
さまざまな人が自分らしく働ける場  
まちの未来を彩る希望



畑の恵みが、いろいろな形で地域を豊かにする  
今回はそんな3つの取り組みを紹介します







たいせつな苗を元気に育てるため、知恵を出し合い工夫しながら作業中

# 作物の成長を見守り 収穫をよろこぶことで深まる絆

◎農業サロン「さんさんファーム」(宮城県亘理町)

ライター：熊谷智美

## ポイント

- 農作業のなかで、メンバーそれぞれが持ち味を発揮!
- 芋煮会や野菜の販売をとおして、メンバーだけでなく地域の皆さんと収穫をよろこび、交わる機会をもっている

5月中旬の金曜日、住宅地のなかの畑に集った10人ほどのメンバーが、ナスやオクラの苗植えや、大きく育ったキャベツの収穫などに汗を流していた。この農業サロンの名前は「さんさんファーム」。近くには震災による集団移転先団地やマンション形式の災害公営住宅がある。

## 畑で生まれる出会いの機会

亘理町内では一昨年度までNPO団体主導で、仮設住宅に暮らす人たちが農作業を行う取り組みがあった。NPO団体の活動終了にともない農作業はほかの運営グループに引き継がれたが、活動場所などの問題で作業に参加できない人もでてきた。「農作業ができなくなると寂しい」という声をキャッチしたのは亘理町社会福祉協議会。2016年、農作業をしたい人の受け皿として、また災害公営住宅や集団移転による新しい住民と既存の地域住民の交流の場として、亘理町社協が農業サロンの運営を始

めた。

春に、回覧や説明会などで農作業をしたい人を募ったところ、15人ほどのメンバーが集まった。震災前には農作業をしてみたいけれど集合住宅で暮らすようになってできなかった、家庭菜園を始めたものの上手くできないので習いたいなど、メンバーの参加動機はさまざまだ。「災害公営住宅近くの公園で毎朝行われているラジオ体操に参加しているうちに、自然と畑に来るようになった」という人もいるし、隣の山元町から移り住んで近所に知り合いがいなかったという人もいる。



土を耕して畝をつくる作業は力仕事だ





## さんさんファームの皆さん

### 「新しく生まれたコミュニティに 採れたて野菜をともに味わう仲間ができた」

**収穫のよろこびを  
地域の人たちと分かち合う**

初年度は農業に詳しい町内の方をアドバイザーとして招いて作業を進めた。アドバイザーの協力もあって、キュウリ、ナス、トウモロコシ、カボチャ、ソバなど、多彩な品目を栽培。収穫した野菜は畑に建てられた休憩スペースで、たとえばキュウリを塩揉みしたり、枝豆を茹でたりして採れたてを味わったり、たくさん採れたものはメンバーで分けて家に持ち帰ったりした。

ソバは乾燥させて脱穀し、ソバ粉にして打ち立てソバの味を堪能した。メンバーは、「新ソバを3回も食べたよ」「挽きたて打ち立てのソバは香りがよくて、本当に美味しかった」と楽しそうに話す。

たくさん採れた野菜は販売もした。災害公営住宅団地で行われている朝のラジオ体操の際に告知をしたり、行政区長がお知らせを手伝ってくれたおかげで、売れ行きは好



作業を終えお土産のキャベツに皆さん笑顔

調だったという。野菜販売の収益は肥料や資材代に充てられたほか、昨秋に開催した芋煮会用の肉や調味料の購入にも使われた。

芋煮会は、地域の皆さんとも収穫を分かち合おうと、約1000人分の芋煮を用意。平日の日中にもかかわらず、多くの地域住民が集会場に足を運び、用意した芋煮がすべてなくなるほどの大盛況だった。普段会わない人と顔を合わせることで、食をとおしたなどやかな交流の場は好評で、その後も「また芋煮会あるのかな」と聞かれることがあるという。

#### フラットな関係と

#### ムリのない活動が特徴

昨年度はアドバイザーに頼るところもあったが、2年目の今年は新しいメンバーを含め、みんな話しかって作業を進めている。「私たちはみんな平等な関係だから、代表やリーダーはいないの」との言葉どおり、集まったメンバーでゆるやかに役割分担がなされて作業が進められる。まるで古くからの仲間のようなだが、「さんさんファーム」に参加してはじめて出会った仲間たちだ。

メンバーは登録制で現在15人ほど。活動は毎週金曜日の10時からで、だいたい10人ほどが集まる。活動は週1回のみなので、晴れの日が続くと社会福祉協議会のスタッフが水やりなどのサポートをしている。メンバーから「散歩のついでに水やりしておいたよ」と言われることもあり、「このように自分たちの畑だと思っただけでももらえるとうれしいです」と町社

協の川端康裕さんは言う。今後はさらに自主的に活動してもらえることを期待している。

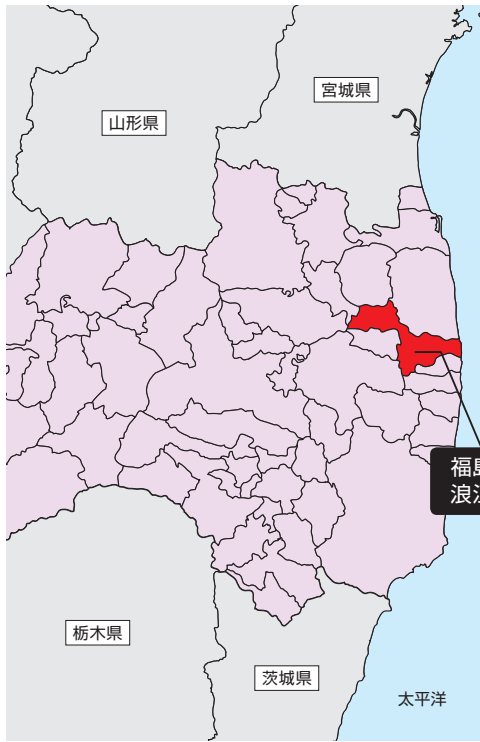
#### さらなる出会いと

#### 交流の期待がふくらむ

今年も芋煮会や新ソバの会など楽しみがいろいろある。町内の障害者施設で育てた苗を分けてもらっていることもあり、施設の利用者との交流の機会もあろう。収穫した野菜を使って、地域の子どもたちとも交流できないかとも考えている。

土を耕す作業、種まきや苗植え、草取りや水やり、収穫、そして野菜の調理など、畑の仕事にはメンバーそれぞれが持ち味を発揮できる場面が多くある。メンバーでなくても、販売される野菜を買ったり、芋煮会に参加することで、顔見知りになる機会もある。新しく移り住んだ人が多い地域において、「さんさんファーム」は農作物を栽培するだけでなく、新たなコミュニティづくりの一步になるかもしれない。





一致団結して畑仕事

# 浪江町に、花開く明日を

◎特定非営利活動法人 Jin (福島県浪江町)

## ポイント

- 若者や高齢者、障害のある人がともに働ける、共生の場
- 若者に花づくりの技術を伝えて、自己実現の機会に。若者を、産業を育てることがまちの未来にもつながる

福島県浪江町。東日本大震災の影響で全域が避難指示区域に指定されていたが、2017年3月に、居住制限区域及び避難指示解除準備区域については避難指示が解除された（帰還困難区域は継続）。そして、浪江町役場と周辺の仮設商店街「まち・なみ・まるしえ」から、少しずつ人のにぎわいが戻り始めている。

### 浪江町を元気にしたい

特定非営利活動法人 Jin は、浪江町内の畑で、6人の職員と障害のある人1人、高齢者複数人で、花などを育てている。「花づくりをきっかけにして、まちを元気にしたい」。そんな願いのもとに活動を続けてきた。

浪江町で生まれ育った、代表の川村博さんが2005年に設立した Jin。震災前は、障害のある人や高齢者、子どもを対象にしたデイサービスやリハビリなどの事業を町内で展開していた。その当時から事業所内に

畑を有し、スタッフや利用者で野菜の栽培も行っていた。震災後は福島県から委託を受けて、県内3か所のサポートセンターで避難者の生活支援を担った。浪江町（幾世橋）が「避難指示解除準備区域」に指定された13年4月からは、町内に戻って畑を再開。現在は、障害児放課後ケア事業、児童福祉法によるデイサービス事業、介護保険法による通所介護事業を展開するとともに、畑での花づくりに力を注いでいる。浪江町を軸に、一貫して深く人を思いやる「仁」の心をもって活動にあたってきた。



ビニールハウス内の様子。光や温度、水を調整して育てる



## 特定非営利活動法人 Jin

### 代表 川村 博さん

「学んだことは行動に移さないと、学んだことにならない」  
 「法人として輝く存在になりたい。そうすることで、自分もやりたいという人が出て効果が生まれる」



#### 「畑」共生の場

Jinの畑では、職員と高齢者、障害のある人たちがともに働いている。職員は皆、他地域から浪江町に通っており、そのなかには、震災以前は浪江町に住んでいた人たちもいる。サポートセンターを通じて避難している高齢者に協力を呼びかけ、ハローワークや障害者就業・生活支援センター経由で障害のある人たちを募った。

この地域の高齢者はかつて農業を生業としていた人が多く、こうしてまた畑仕事に携わることで、健康増進や生きがいにつながっている。障害のある人は、挨拶の仕方や時間意識、報告の仕方といった社会のルールを学ぶ場にもなっている。「障害のある人たちに、ここで力をつけ、自立して外に出ていけるようになってほしい」と職員は考えて、日々接している。実際、ここから一般就労した人たちもいる。

また、畑のなかで、障害のある人がJinの若手職員を指導する側に回るこ

ともあるという。畑の場では、「支える人」「支えられる人」といった枠組みはとくに曖昧で、逆転する。障害があっても、高齢でも、誰かの力になることができている。ここでは、そんな「支え合い」の関係が実践されている。

#### こだわりの花づくり

Jinが畑で育てている花は、小菊や輪菊、リンドウなど。なかでもトルコギキョウに力を入れており、浪江町の花としてブランド化していきたいと考えている。こだわりは、時間をかけて技術をつぎ込み、高い品質の花を育てていることだ。「真摯な気持ちで、時間をかけて育てること」を大事にしている。高い技術は、花のオリンピック（フロリアード）で数々の金メダル（1席）を獲得している、「フラワースピリット」（長野県）という切り花栽培の企業から教えてもらった。育てた花は、東京都中央卸売市場「大田市場」などに高値で出品されている。「一流の人たちとつな



丹精込めて花を育てている

がると、市場もトップとつながることができそうです」と川村さんは語る。

#### まちの未来に花咲け

Jinは、インターンして働きたい若者を職員として迎え入れ、そのなかで花の栽培技術と経営の方法を伝えている。「若者には、将来独立して花で生計を立ててほしい」と川村さんは話す。そのことが、まちの元気にも結びつくと考えている。

現状では、浪江町内に働ける場所はまだまだ少ないという。花づくりがビジネスモデルとして確立すれば、町に戻った人が働ける

場所が生まれるし、ほかの地域から人を呼びかけたいにもなる。「補助金をいただいて行う『復興のための花づくり』に終始しては、形として定着しにくいです。『営農』として本気になって取り組み、ビジネスモデルとして形にすることが大事だと思います。『お金を稼ぐことができる』というのは、外から人を呼ぶ魅力になります。お金をたくさん稼いで税金を納めることもまた、まちを元気にします」（川村さん）。

このように、Jinの進める「畑での花づくり」は、「年齢や障害を超えた共生の場づくり」や「若者の自己実現の機会」につながっている。そして、「浪江町の未来」にも続いていく。田

#### DATA

### 特定非営利活動法人 Jin

福島県浪江町大字幾世橋字一里檀  
137-1  
電話 0240-24-0833





月に一回第2火曜日に開催される定例会の様子

## 出合いが芽吹きつながりを育む

◎市営新立野第二復興公営住宅「菜園会」(宮城県石巻市)

### ポイント

- 復興公営住宅での趣味の活動をとおした仲間づくりが、新しいコミュニティづくりにつながる
- 会の活動が、会のメンバー以外の住民と顔見知りになるきっかけに

宮城県石巻市の市営新立野復興公営住宅では、同住宅第一集会所に事務所を置く「石巻じちれん」のサポートもあり、住民による多数の愛好会やサークルが活動している。なかでも最初に立ちあがった会が、同第二復興公営住宅の住民を中心に活動を行う、「菜園会」だ。

### 会の活動から

#### 見守り合う関係へ

同住宅への入居が開始されて間もない2015年4月頃、敷地内に整備されている畑を11の区画に分け、それぞれの区画を借りたい人を募集した。間もなく10区画の借り手が見つかり、同年7月2日に菜園会が結成された。借り手の見つからなかった1区画は共同で管理を行い、採れた野菜はみんなで分け合う。

冬季以外は月に1回、第二火曜日に定例会を開いている。18時30分から同住宅の第二集会所に集まり、話し合いや情報交換を行う。はじめのうちは会話もぎこちなかったと言うが、結成から約2年が過ぎ、気心

の知れた関係になりつつある。定例会では畑に関する話題だけでなく、体調が思わしくなく、会を欠席したメンバーについて、「今日、歩いているのを見かけたよ」など、気にかける言葉が交わされることもある。自然な形で「見守り」や「気にかけて合い」ができることも、サークルなどの趣味の会を通じた仲間づくりだからこそだろう。

### 菜園が地域の輪をつなぐ

菜園を通じて仲が深まったのは、同会のメンバー同士だけではない。会長の山根けい子さんは、「畑にいるといろんな人が声をかけてくれます」と話す。菜園のそばを通りがかる人と挨拶を交わしたり、立ち話したりするうちに顔見知りが増え、自然と交友の輪が広がっていくという。

菜園で採れた作物も、交流を深める大事なきっかけとなる。同会メンバーの荒井慶治さんは、「挨拶したり、話したりした人に、畑で採れたものをおすそ分けしています。よろこんでも



学生ボランティアが作成した菜園の看板と共同区画

らえると、こちらもうれしい」と、はにかんだ笑顔を見せた。挨拶からもう一步、住民同士の仲が深まるために、おすそ分けは重要な役目を果たしている。

また、作物はみんなが集まる機会づくりにも一役買っている。16年8月には、共同区画で採れた枝豆をおつまみにして、収穫祭を行った。定例会のなかでそのときのことに話が及ぶと、メンバーの顔には自然と笑顔が浮かんだ。「あれは楽しかったよね」「今年もまたやりたいね」と弾む声が続く。それぞれ作物を育てるだけでなく、みんなで見分け合い、共有できる楽しみがあったこと

も、同会のメンバーが仲良くなれた秘訣なのかもしれない。

### 畑で育つコミュニティ

災害公営住宅などで、交流会への男性の参加が少ないことが悩みとして聞かれることが多いが、同会は10人のメンバーのうち8人が男性と、圧倒的に男性の比率が高い。荒井さんは、「お茶会やサロンには参加しづらいけど、こういう会なら男も参加しやすい」と話す。

また、以前は畑仕事などしたことがなかったという佐藤静子さんは、「何もわからなかったけど、みんなが教えてくれたから去年はたくさん作物がとれた。一人じゃとてもできなかった」と振り返る。

性別や経験にしばられず、みんなが楽しめる畑仕事。活動をおして同住宅内に芽生えたコミュニティの芽は、これから楽しい活動のなかで育っていくことだろう。

島根大学 教育学部 共生社会教育講座 教授

### 作野 広和 (さくの・ひろかず) さん



1968年島根県松江市生まれ。広島大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、同大助手、島根大学准教授を経て、2014年より現職。専門は農業・農村地理学、過疎・中山間地域論、GIS。総務省「地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する研究会」委員、総務省「これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会」構成員など。島根県、兵庫県を中心に、市町村レベル、小学校区・地区レベル、集落レベルの地域づくりに参画。島根県江津市、邑南町、奥出雲町に研究室の分室「ラボ」を設置し、住民との協働による地域づくりを実践中。

## 専門家に聞く地域づくりのヒント

「つながる」ために  
「つなげる」ことがたいせつ

これまでの暮らしを続けていくことが住民の願いである。このような、地域のささやかな願いを実現することを、「ありのままの地域づくり」と称している。しかし過疎化や高齢化によって、何もしないままでは従来の暮らしは維持できなくなりつつある。とりわけ、東日本大震災のような災害が発生した場合、「ありのままの地域」を取り戻すために「地域の結い直し」が必要である。その際、「無理をせず」「できることから」「コツコツ」が合言葉となる。このような、住民の身の丈に合った活動の継続を、さしあたって「半歩前の地域づくり」と称することにする。ここに記された3つの事例は、「半歩前の地域づくり」として貴重な実践である。

### 「つながる」ことの必然性

人は、一人では生きていけない動物である。だからこそ、地域や職場、趣味の集まり等でコミュニティが形成された。ところが、21世紀に入ったあたりから、地域コミュニティの必然性が急速に薄らいでいった。しかし、このような時代だからこそ、助け合いや支え合いが必要であることは言うまでもない。そのために、世帯と世帯が、個人と個人が「つながる」必要がある。ここに掲載された3つの事例は、いずれも「つながる」ことの意義を訴えている。ただし、そのスタイルはあくまで自然体であるし、多様である。

### 「つなげる」ことのたいせつさ

それでは、これらの活動が自然発生的にスタートしたかという、必ずしもそうではない。農業サロン「さんさんファーム」に対しては亙理町社会福祉協議会が、石巻市の「菜園会」に対しては石巻じれんが、それぞれの活動の立ちあげに背中を押し、継続するために「着かず離れず」のサポートをしている。NPO法人Jinは、活動の主体として紹介されているが、人と人をつなげる役割を担っている。

地域づくりには、先祖代々住み続けてきた「土の人」と、地域外からやる気・元気とともに地域づくりの種を運んでくれる「風の人」が必要だと言われている。しかし、土に種が落ちたとしても、発芽して成長してためには、「水の人」が必要だと思われる。そして、その「水の人」が人と人、組織と組織、地域と地域をつないでいく必要があろう。誤解を恐れずに世のなかで流通している言葉を用いれば、「中間支援」の役割を有する組織や人たちの存在は、地域づくりにおいて不可欠である。

かつて、人と人は自然につながっていたが、今日では、意図してつないでいく必要がある。地域の暮らしを豊かにするためには、「つながる」必要があり、「つなげる」ことがたいせつであることを、再確認しておきたい。





移送支援の際は同市社会福祉協議会で所有する有償移送用の車両を使用する

## 住民が支え合う生活支援 ②

市民有償ボランティア「ささえ愛ネットワーク」  
(宮城県白石市)

# 有償サービスの利用をおして、 新たなつながりを紡ぐ

2012年に活動を始めた白石市の市民有償ボランティア「ささえ愛ネットワーク」は、生活支援と移動支援に取り組んでいる。同市社会福祉協議会が事務局を務め、利用には会員登録が必要だ。現在、ボランティアを行う協力会員は25人、利用会員は30人ほどが登録している。利用会員の山本修子さん(76歳)は、13年の10月から月に1〜2回程度、病院への通院の際に移動支援のサービスを利用している。山本さんの移動支援サービスを行うのは、協力会員の佐藤謙五さん(69歳)。当初は顔見知りですらなかった2人だが、サービスの利用をおして信頼関係を築いてきた。サービス開始直後は、山

本さんの受診が終わるまで別の場所で待機していた佐藤さんだったが、「どうしているか気になるから」と、待合室での付き添いも行うようになった。山本さんはときどき呼び出しのアナウンスを聞き逃してしまうことがあったが、佐藤さんが付き添ってくれたことでその心配もなくなったという。「足元が悪いときには、『気をつけてね』と声をかけてくれたりもする。ほんの小さなことだけど、すごく安心します」と、山本さんは満面の笑みを見せる。

また、サービス利用時の佐藤さんのおしゃべりは、山本さんの楽しみの一つになっている。ひとり暮らしで子どもが遠方に住む山本さんにとって、

日常の小さな疑問や悩みを話すことができる時間はとても貴重な。佐藤さんは、「利用会員さんにはひとり暮らしの人が多いので、サービスはもちろん、おしゃべりができることも、よろこんでもらえます」と話す。

サービス利用の際のおしゃべりとおして、利用会員の異変に気がつくこともある。協力会員は月に1度、事務局である同市社会福祉協議会に活動報告書を提出に来るが、その際に利用会員の体調の変化について話を聞いた事務局が、担当ケアマネジャーなどにつなぐなど、見守りの一環としても機能している。今後の活動について、同市社会福祉協議会の菅原顕子さんは、「利用

### ● DATA

#### 市民有償ボランティア「ささえ愛ネットワーク」

白石市社会福祉協議会を事務局として、2012年より活動を始めた会員制の有償ボランティア。主に生活支援と移動支援を行う。利用料金は1時間500円。(移送支援は別途ガソリン代が加算)

会員に比べて協力会員が少し少ない。協力してくれる人がもつと増えれば」と話した。

お話の最後に、「サービスを利用して、本当によかった。助かっています。これからもよろしく」と、微笑みかける山本さんに、「こちらこそ」とうなずいた佐藤さんの様子に、これまで培ってきた信頼関係が垣間見えた。有償サービスをとおして、新しいつながりが紡がれている。吉



お話を伺った利用会員の山本修子さんと協力会員の佐藤謙五さん



活動中のおしゃべりはお互いに楽しいな時間



男性の協力会員の活躍も多い



DATA

## 特定非営利活動法人 びば！！南三陸

〒986-0782  
宮城県南三陸町入谷字  
鏡石4-1(晴谷驛内)  
TEL:0226-25-8080

43回目

市民リレー

# 東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## ここから、晴れやかな笑顔を 広げたい

◎びば！！南三陸(宮城県南三陸町)



びば！！南三陸の職員。左が、事務局長の西城幸江さん



エコクラフトの作業中は真剣そのものだが、  
合間には講座でできた友だちと談笑する



晴谷驛の外観

木材を底に敷き、鮮やかな色合いのクラフトテープを編み込んでいく。しだいに、かわいらしいカゴの形ができていく。これは、エコクラフト教室の風景だ。参加者からは、「形になっていくのがわくわくする」「つくって、友人にあげるとよければ」「皆とのお話が楽しい」と、好評を博している。

宮城県南三陸町入谷地区に、晴谷驛という建物がある。この場所では、エコクラフトをはじめ、習字、日曜大工、視察ツアーなど多彩な講座が毎日開催されている。参加費は講座1回につき300円〜500円ほど(会員割引あり)。現在の法人の正会員は53名で、講師の役目も会員である住民が担う。なお、晴谷驛は会員以外も利用が可能で、講座の参加や施設利用を通じて年間累計約1600名に利用されている。

運営を担うのは、「特定非営利活動法人びば！！南三陸」。震災で失われた地域のつながりを取り戻すために、町の住民が中心となって活動を始め、法人が設立された。2015年6月に晴谷驛が建設され、以降、拠点を置く。

同法人の事務局長西城幸江さんは、町で生まれ育った住民の一人でもある。日々、利用者

とは同じ目線で、自然体でかわる。「一方が他方を『支えてあげるだけ』の立場になってしまおうと、支える側が自分の考えを押しついたり、支えられる側が遠慮したり反対に過度な要求をしたりと、歪みが生まれるのではないだろうか。できることからお互いに力を出し合う、『支え合い』の関係が大事です。利用料をいただいていることで、自由な意見が生まれ、サービスの提供者として運営を省みることもつながりません」。なお、運営には利用費のほか、町や県、民間の助成金も活用している。

同法人は、このような講座の運営とともに、高齢者の人材派遣も行っている。目的は、高齢者の知恵や技を社会に役立てて、その生きがいをつくることだ。これは解散した南三陸町シルバー人材センターが担っていた役割であり、センターの元職員が法人の設立に携わった経緯から、その役割も受け持っている。今後は、会員を徐々に増やしつつ、それに応じて引き受ける仕事も増やしていくつもりだ。

日常を取り戻しつつある南三陸町で、住民同士のほだけたつながりを再び編み込んでいく。そんなきっかけになればいい。

田



DATA

## 安積甚句愛好会

拠点：下町集会所（福島県郡山市大槻町下町102）  
活動：毎月第1・3金曜日午後1時半～3時半

44回目

市民リレー

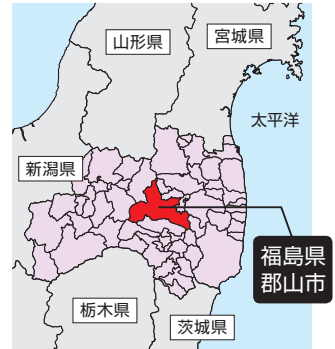
# 東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## 「このまま終わらせない」 活動の場求め愛好会結成

◎安積甚句愛好会（福島県郡山市）



横笛の練習

愛好会の皆さん

盆踊り唄を謡う

横笛（篠笛）の講座を受講した人たちが、活動の場を求めて自ら和楽器演奏と民謡歌唱の愛好会を立ちあげた。

講座は、福島県郡山市の大槻公民館（大槻町）が毎年7月、5回コースで開いてきたもの。受講者は、講座の締めくくりに地区の夏祭りや演奏を披露する。

昨年まで5年連続で受講した齋藤房江さん（68歳）が、「せっかく同好の士が集まって、閉講後はバラバラになってしまふ。このまま終わるのはもったいない」と周囲に話すと、その思いに共鳴する人が現れた。

齋藤さんの話を受けて、霜鳥栄さん（69歳）が、受講者に会結成を呼びかけた。すると6人が賛同。講師の伊藤喜四郎さん（84歳）も指導役での参加を快諾した。

こうして昨年8月、伊藤さんの自宅近くの集会所を活動拠点とする「安積甚句愛好会」結成にこぎ着けた。

霜鳥さんと齋藤さんは、それぞれ正副代表として会を支える。会員は当初の8人から、今年5月までに10人へと増えた。年齢層は30～70歳代と幅広い。

公民館の生涯学習や民間のカルチャー教室は、健康づくりや仲間づくりの「通いの場」でもある。ただ、閉講後の活動の受

け皿がないと、その効果は限定されてしまう。受け皿がない場合、受講者が活動団体を自主結成すれば、長期継続可能な通いの場創出につながる。

会の活動は第1・3金曜日の午後。伊藤さんの指導のもと、発声から始まって歌唱、横笛、尺八、太鼓へと移っていく。全員で奏し謡う、その熱気と迫力は圧巻。表情も生きいきとして輝きを増す。

「演奏や歌唱のレベルは皆まちまち。未熟でも、気にすることはないんです。自分のペースで練習を積みばいい。楽しむことが第一ですよ。和気あいあいとした雰囲気での活動を心がけています」と霜鳥さん。

会の名称にもある「安積甚句」は、郡山市に古くから伝わる盆踊り唄の一つ。横笛、太鼓、鉦の演奏に合わせて謡われ、多くの地区で盆踊りの「定番」となっている。近年は奏者や謡い手が不足気味で、将来の継承も危ぶまれるという。

会は、甚句を継承し、祭りの担い手となることを目標に据える。また、高齢・障害などの介護施設や幼児保育施設でのレクリエーション活動にも協力したい考え。

会を結成し、楽しく活動することが、地域づくりの力になっていく。木



# 住民が見守り合える地域づくりを

## 宮城県七ヶ浜町



### 住民が見守り合える地域づくりを

災害公営住宅や防災集団移転地の整備が完了し、2017年3月いっぱいですべての仮設住宅を閉じた、宮城県七ヶ浜町。東日本大震災では、町内外の106人が亡くなり、行方不明と震災関連死を合わせて111人が犠牲になった。まちには17年5月時点で、6603世帯、1万9093人が暮らす。昔ながらのご近所づき合いなど、住民間のつながりが維持されるよう心がけながら、震災後のまちづくりが進められている。

### 状況に合わせた戸別訪問

震災後、「自分たちも」ともと生活していた地区で暮らし続けたい」「住み慣れた地区内に災害公営

住宅を建てたり、集団移転させてほしい」という住民の声があがった。自分たちの暮らし慣れた地区で生活再建できるよう、それぞれ被害の大きかった地域に計212戸の災害公営住宅建設と計194戸の防災集団移転が行われた。町社協が被災者支援の業務の一部を町から受託。8人の生活支援相談員を中心に、情報を共有しながら、訪問活動などをおし

て、再建した人たちの個別の見守りと、住民同士のより強固なつながりづくりにあたっている。被災者支援としての訪問活動は、「津波浸水区域・防災集団移転地区」や「災害公営住宅」に居住する人たちに重点をおいて実施している。津波浸水区域では、仮設住宅に入居したり、環境が激変しながらもひとり暮らしを続けてい

る人がいる一方、多少の家屋の修繕でもととの家に住み続けられている人もいたり、状況はさまざまだ。住宅の建て直しが落ち着いても、高齢者世帯や、高齢者が日中を1人で過ごす世帯などもあり、生活の不安がなくなるわけではない。再建した人の抱える不安も軽減できるように取り組む。



料理教室などで住民同士の交流を深める

防災集団移転地区では、仮設住宅入居時に別々に暮らすようになった高齢夫婦と息子家族の2世帯が、新居完成に合わせて再び同居を始めたりもしている。しかし、震災後の5年間で新しくできたそれぞれの生活のスタイルがかみ合わないということもある。そのような悩みを生活相談支援員が訪問時に聞くこともある。津波浸水区域と合わせて、およそ80世帯が対象だ。

災害公営住宅でも同様に、およそ40世帯を訪問している。これらすべての訪問者リストは、同町と同町社協が定期的に行う会議のなかで、訪問の際の様子などをふまえて見直しを重ねる。健康状態や暮らし方から、訪問の必要がなさそうだと判断すれば、リストから外すこともある。

また、町社協は、町内全域を対象に、被災した80歳以上の単身高齢者などの訪問も行い、在宅や災害公

営住宅の被災者と定期的顔合わせ、安否の確認や生活状況の把握に努めている。町で独自に設けている基準に合わせて、障害の有無、心身の健康状態や介護保険サービスの利用状況などから、見守りの必要性・優先度を整理する。1世帯に対して月1〜2回訪問するが、必要に応じて頻度を高めながら伺う。そして、心身の健康状態を気にかけて、孤立を防止し、生きがいのある生活を送れるように関係機関と情報共有しながら見守る。

### 地域のつながり再び強化

著しく高齢者の身体機能を向上させたり、健康状態を改善することは難しいが、身近な人同士で見守っていけば、暮らしやすさを高めることができる。町社協は、住民同士の見守



り意識を向上し、助け合いを育めるよう、災害公営住宅のある5地区で「見守り連絡会」を設け、うち4地区ではサロンを開催している。

同連絡会では、民生委員・児童委員や災害公営住宅入居者の世話人会の役員、区長などが、地域の近況などを話し合う。参加する住民の立場はさまざまで、地区ごとに任意のメンバーで集まり、話し合いをしている。

月1回から2か月に1回ほどの頻度で、地域内の出来ごとなどに合わせて開催する。地区サロンの様子や地区行事の計画のことについて話したり、地区内に体調を崩している人



常設の交流スペース「きずなハウス」

がいるといったことも情報共有されたりする。住民間の見守りが必要そうな人がいれば、その人の様子も追って報告される。

地区サロンにも、住民の声を取り入れながら、より多くの人が参加し、ふれあってもらえるよう工夫している。料理教室を開催して、住民が集い、にぎやかに調理をしたりする。

「成功体験を積み重ねていくと『活動を』しようかな」という前向きな気持ちになれる。住民がそのような意識をもち、自分たちで主体的に活動できるようになってほしい」と話すのは、町健康増進課・七ヶ浜町地域包括支援センターの保健師。同センターも、地区サロン参加者の要望に応じて勉強会や体操を行ったり、町社協と情報を共有しながら住民全体の健康を見守っている。

たとえば、震災の影響や暮らしの変化による精神的な不安・負担があると体調も崩れやすくなってしまうが、まず個別の課題を解消していくことが、一人ひとりの元気な暮らしに

つながる。そして、住民同士をつなぎなおすことで、一層生活に安心感が増す。

町社協の生活支援相談員菊地顕あきひろさんは、取り組んでいる支援活動について「震災で失われたピースを埋めるような作業」と感じているという。住環境などが変化していくなかで、震災前には強かったはずの地域のつながりを取り戻してもらおうとサポートしている。

#### 町外の団体も協働

11年の4月より、町生涯学習課が管理する中央公民館に併設されて、「きずなハウス」という、地域住民の交流スペースが設けられた。14年12月から、認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード(RSY)が運営している。RSYは災害支援や防災・減災の推進を専門とするNPO法人で、愛知県名古屋市内に本部をかまえているが、東日本大震災後から同町にも拠点をもち、継続的に町内で活動している。

震災直後は、避難所での

足湯やボランティア支援のための炊き出し、災害ボランティアセンターの運営サポートなどを行っていたが、しばらく経ってから、住民同士がつながり、支え合う機会をつくれるように、復興のまちづくりを焦点を当て、支援に取り組んでいる。

狭い仮設住宅の生活のなかなどでも、子どもたちがのびのび学べるよう、企業からの寄付を得て、学習車「きずな号」を運行してきた。そこには、子ども向けの本や自主学習用の机・椅子が備え付けられていて、集中して宿題に取り組み子ども姿が見られる。また、同ハウスには駄菓子販売やコミュニティスペース、地域の情報コーナーなどがある。1か月あたり1300人もが利用し、子どもから大人までさまざまな人が集う。

災害公営住宅・防災集団移転地での移住後のコミュニティづくりや、孤独死・生活不活発病防止を目指して、住民が主体的に取り組みサロンや食事会などの集いの場づくりもサポートし

ている。住民同士でグラウンドゴルフをしたり、芋煮汁をつくったり、多いときには当日500人近くがイベントに参加する。RSYは町、町社協、住民団体などと協力しながら活動に励んでいる。

ハウスは、隣接地に新たに建て直される予定で、移転後の運営者は、町生涯学習課の公募・協議により決まる。RSYも移転後の運営継続に名乗り出て準備を進めているが、事務局スタッフの植島江梨佳さんは「ゆくゆくは、きずなハウスを地域の人に運営してもらおうようにしたい」と話す。専従職員2人のほか、アルバイトスタッフが6人いて、つながりづくりの拠点である同ハウスを地域住民の力で運営できるよう、地元の人を雇用し、一緒に活動している。

住民がそれぞれ身近な人と交流する機会をまち全体に広げ、気にかける関係性を増やしていったらいいか。地域をつくり方をまち全体で模索し、住民主体で支え合うまちづくりを進める。



## ● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ、岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆,CLC発行)。



# 生まれるも、逝くも、昔は家だった。

ご近所福祉クリエイション主宰 酒井保  
ご近所福祉クリエイター 酒井保

暮らしのなかに生と死があった

「福祉とは『ふだんのくらしのしあわせ』のこと」

福祉を説こうとしたときによく用いられる言葉で、はじめて耳にしたときは「なるほど!それで『ふ・く・し』か。うまいこと言うなあ」と感心した記憶がある。

僕が子どもだった昭和30年代。その時代には、「ふだんのくらし」のなかに生と死があった。赤ん坊は家で生まれ、お年寄りも家で看取られた。僕と同年齢のカミさん(僕の伴侶のこと)は実家で産婆さんに取りあげられ、その現場には家族全員が参加していたと聞いている。だから、盆暮れにカミさんの実家へ行った際、酒が入ると必ずその話で盛りあがってしまう。

「赤ん坊というのは、こがいにこまい(『こんなになさい』の意)もんかと思ってお。産声が聞こえたときにやあ、みんな抱きおうてよろこんだもんだよ。隣近所の人みんな赤ん坊を見に来てくれて、地域のみんなが祝ってくれた」と義兄からは何度も聞かされた。

僕のほうはというと、当時、自宅から車で一時間ほど離れた産婦人科の病院で生まれたらしい。「お前が生まれる

ちよつと前に地域で唯一の産婆さんが亡くなってしまおう。産婆さんもおらんような田舎だったからね」というのが、僕が病院で生まれた理由らしかった。しかも、僕が産声をあげたとき、父親はパチンコに興じており、なんの感動的な逸話も残っていないということだった。

## 「ふだんのくらし」今と昔

いまの時代の「ふだんのくらし」に人の生と死をみることは少なくなつた。赤ん坊は病院で生まれるのが普通のこととて、お年寄りは病院や施設で人生を終えることが、いまでは普通のことになった。

僕が子どもだった頃、『シャボン玉ホリデー』(昭和36年6月4日から昭和47年10月1日)日本テレビで放送されていた音楽バラエティ番組・ウィキペディアより)という人気テレビ番組があった。歌とコントで構成された番組で、わが家においては家族全員が揃って観ていたという記憶がある。その番組のなかで、タレントのハナ肇と双子の女性歌手ザ・ピーナッツが演じる定番のコントがあった。

床に伏した高齢の父親に扮するハナ肇のところに、その

娘役のザ・ピーナッツの二人が、「おとつあん、お粥ができたわよ」と膳を運んでくる。「いつもすまないねえ」と言う

父親の言葉に、「おとつあん、それは言わない約束でしょ」と諭すように返す娘たち。いま思えば、介護の様子なのだが、この時代、このような光景は、どこの家にも当たり前にあったように思う。そういうことがあるのが、「ふだんのくらし」だった。

この番組の定番のコントと言えば、もう一つ。

布団に横になっていられる高齢の父親の脈をとりながら腕時計を凝視している医者。その隣には看護婦がいて、布団の周りを大勢の家族が囲んでいる。沈黙のなか、医者が一言「ご臨終です」と言うと、家族が「うわあああん。お父さあ〜ん」と泣き叫ぶのだが、その大声に驚いて父親は生還する。このコントもいま思えば看取りの様子で、その時代には介護も看取りも暮らしのなかに当たり前にあったから、そのことを「介護」とは言わなかったし、「看取り」とは言わなかった。

## 住み慣れた地域で暮らし続けた時代

「高齢者の尊厳の保持と自立

生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築を推進……云々」ということが言われている。

介護という言葉がなかった時代のお年寄りは、「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けること」ができていた。いまの時代は、わざわざシステムを拵(こしら)えないと、それができなくなつたということがある。そう考えると、昭和の時代の「ふだんのくらし」がなつかしく、またすばらしく感じられる。生と死……よるこびと悲しみが「ふだんのくらし」のなかにあった時代。

父親が生きていた時に聞いたことがある。「僕が生まれたときに何か感動的な出来事はなかったの?」

父親は一言「あの時は、球がようけ出た」

わが子の誕生よりも、パチンコに勝つたことが感動だったらしい。



# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 理想の頑固親爺

6月11日に東北絆まつりが開催され、東北6県の「祭り人」を堪能しました。仙台での開催とあって、祭りの先導役は、大崎八幡宮の『裸参り』の重鎮でした。その中央にいて、堂々たる貫禄を示していた『親爺』が今回紹介する『祭り人』です。以前も紹介したかもしれません。忘れていたので、ご容赦願います。

隣の紙面を飾る浜上さんも、私が知る限りにおいて相当の頑固。けれどソフトな語り口、優しさのあふれる姿勢で、一見頑固親爺とは思えないのですが、実は相当なものです。やさしい頑固さが素敵です。

浜上さんと対照的な冒頭の「頑固親爺」、絵に描いたような頑固さには、只々敬服するのみです。江戸時代の昔でも通用するのは風体だけではなく、生き方、市井の人としての矜持を常に表現されているからでしょう。わかりやすいけど、奥が深いので、簡単にわかったつもりでいると「しっぺ返し」が待っています。けれど、この親爺のファンの多いこと、特に若い連中から敬愛されているのは納得です。

どんな人とも変わらない姿勢で接する姿に、私は対人援助の理想を見る想いです。ほめ過ぎという指摘もありますが(?)、私としてはこの親爺をけなすことなど、まったくの無謀なことではありません。気がつく、私の名前を呼び捨てにする同世代が少なくなりました。

会う機会も同様です。若い世代から「さん」付けて呼ばれることが当たり前ではあっても、この親爺から呼び捨てにされる心地よさには敵いません。「気」を伝え合うことを基本にする「生き方」は、いまはやりの『村度』とは違います。立場で仕事をするのではなく、人として「生き方」の勝負をするのだ、と気づかされます。

実は、わが息子がこの親爺に心酔しているのです。裸参りにもここ数年参加しています。私が寒いのが嫌(もっとも、北海道育ちですが…)で、逃げ回っていたのを息子が「村度」してのことなのかは不明です。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章



### 地域の福祉力を高めるための “活動主体”を考える

住民を主体とした地域福祉活動を推進するためには、いかに地域の福祉力を高めるか?がたいせつな要素となってきます。そのためには、地域に福祉を進めるなんらかの“活動主体:組織”が必要です。以前の54号・55号で、既存の自治会に「福祉部会」の設置をお勧めしました。また、関西で多く見られる小学校区の地区福祉委員会や地区社協(地域の自治会や福祉団体や住民からなる小地域での福祉推進組織)のこともふれました。

「昔から地縁関係が強く、何かあるとすぐに助け合うという東北の風土、文化があり、改めて福祉について話し合ったり活動をする組織までは必要ない」との見方もあります。しかし、震災でコミュニティが壊れ、集団移転地や災害公営住宅では住民同士のつながりも難しく、孤立しがちな人も多くなるのも事実です。「地域にすでにある自治会やまちづくり協議会、民児協、自主防災組織を活かして福祉活動を展開すれば十分だ」との見方もあります。東北の地に暮らしていない私には、本当のところはよくわかりません。

ただ言えることは、地域に根差して、しかも福祉の中心を軸に考え取り組むことのできる、なんらかの組織があることとても有効だと言うことです。人口の高齢化、単身世帯の増加、組織離れ、人間関係の希薄化なども進み、地域での福祉活動の重要性はかつてないほど高まっています。将来のことを見据え、ことの重大さを考えるとき、「既存の組織を活かして福祉活動を付加していける」ということではないように思います。もちろん既存の組織にも、これまでにない福祉的な視点での活動と連携した取り組みが必要なことは言うまでもありません。しかし、それだけでは地域の福祉は進まないし、地域の福祉力を高めるにも限界があると感じています。地域で、福祉力を高めるために有効な、なんらかの推進組織をつくる必要があると思うのですが、皆さんはどう考えますか?

ところで、地域で福祉を推進する組織には、地区福祉委員会であったり、自治会やまちづくり協議会の“福祉部会”、地域のボランティアグループ、地域福祉を目的とするNPO、障害者団体のような当事者組織、福祉学習グループなどいろいろあります。次号で、これらの組織と地域福祉についてさらに考えてみたいと思います。

#### 平成29年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修

研修1<初級研修>

【東松島会場】6月22日(木) 矢本東市民センター

【気仙沼会場】6月23日(金) 気仙沼保健福祉事務所

講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

#### 平成29年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<支援に関わるための基礎研修>

【仙台会場①】7月11日(火)~12日(水) エスポールみやぎ

講師:永坂 美晴(兵庫県 明石市望海在宅介護支援センター センター長)

山本 信也(兵庫県 宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当課 課長)

岩城 和志(兵庫県 淡路市社会福祉協議会 参事)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601





## 益城だいすき プロジェクト・きままに (熊本県益城町)

### 授賞理由

避難所でお互いを思い合って信頼し合う、風とおしの良い関係に大きな勇気をいただきました。その活動を称え、これを賞します。



熊本県益城町は、2016年4月の熊本地震により大きな被害を受け、多くの住民が避難所生活を余儀なくされた。町内に最後に設けら

れた避難所、益城中央小学校避難所。ここでは、「主役は私たち」を掲げた住民によつて、行政やボランティアに依存しない自主的な運営が進められてきた。

お互いのことをよく知らない状態から始まった関係は、4か月間の生活をとおして大きな家族のようになった。みんなので一つの食卓を囲み、外出時に「行つてきます」「た

だいま」「お帰りなさい」と声をかけ合う仲になった。仮設住宅内に共用の交流スペースを設置。お茶飲みなどで集まることで、お互いの抱えた悩みや苦しみを共有し、元気を取り戻すことができたという。子どもたちのためには、キッズサロン(共用の遊び場)や学習ルームを設置している。

同避難所でのこうした活動は、「益城だいすきプロジェクト・きままに」と自分たちで命名。合言葉は、「できる人ができることを、できたしこ(できた分だけ)」。通常の避難所マニュアルにあるような「役割分担」は、あえて決めなかった。除草作業や体育館の大掃除、閉

所時の片づけにも、避難所の全員で「できたしこ」で取り組んでいる。

その後、避難所の仲間はいは各仮設住宅や自宅へと分かれていったが、仮設住宅でも避難所で培ったつながりをもとに活動が行われているという。これからも、仮設住宅での自立支援や益城町全体の安全・安心なまちづくりを目的として、プロジェクトは継続していく。

17年2月に宮城県で行われた「S-1グランプリ」第4回いがす大賞」には、代表の吉村静代さんが参加。これまでの活動を発表し、「いがす特別賞」に輝いた。吉村さんは、「他団体の発表を見られて、今後の参考にもなった」と話す。「トントンカラリン隣り組活動隊」の「マイセルフ居酒屋」(57号参照)など、自分たちの活動に取り入れたい発見もあった。

最後に、「いがす大賞」での発表の言葉から引用して、締めくくりたい。「この避難所にはいつも笑い声があった。そして、それは、いま、仮設でも!!」。

### 読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

どの見守り活動も、無理をせず楽しくに活動されているのがとてもいいですね。仲間や近所とのつながり。人のためだけでなく、自分のために。強制されずに、気になることは自分の意志で……というのが楽しく続けられるたいせつなポイントなんだと思います。まさに「情けは人のためならず」ですね。(仙台市青葉区 T・S)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail johoh@clc-japan.com

### 編集後記

今回、取材した「Jin」と「びばり南三陸」では、活動していくうえでの金銭のたいせつさについてお話をいただきました。もちろんそれに尽きるわけではなく、まず活動の理念・想いが根底にあることと思いますが、職員の方の「経済は悪くない」というお言葉が印象に残っています。今回の特集では、「お金をもらって活動する意味」を「地域支え合い」の観点から考えていければと思います。(田中)

### ☆次号予告 特集「生活支援」

#### 平成29年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

##### <地域支え合い実践研修Ⅰ

(地域支え合い活動の発見の仕方・広げ方) >

【仙台会場】7月4日(火)宮城県自治会館

【大崎会場】7月25日(火)大崎建設産業会館

講師:大坂 純(東北子ども福祉専門学院 副学院長)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

木村 利浩(全国コミュニティライフサポートセンター 主査)

##### <地域支え合い実践研修Ⅳ(地域支え合い活動現地視察研修) >

【大分県中津市視察研修】7月20日(木)~22日(土)(泊3日)

講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

